

令和6年度版

愛^えが^がお^お顔



感動ものがたり

受賞作品集

愛媛県



銀行を、 人に合うかたちへ 変えていく。

お金に向き合うことは、お金の先にいる人に向き合うこと。
 だからこそ私たちは、デジタルを取り入れ変革を進めています。
 心地よく、使いやすい、人にとってより自然な存在になれるように。
 どこからでも、つながる。手のひらで、お手続きできる。
 将来の計画を、プロとつくれる。悩みを、もっと分かち合える。
 いま、着実にそれらを実現しています。
 私たちはきっと、ずっと、こんな銀行になりたかった。

DHD 特設サイト
 はこちら → 

Better Money,
 Better Life.

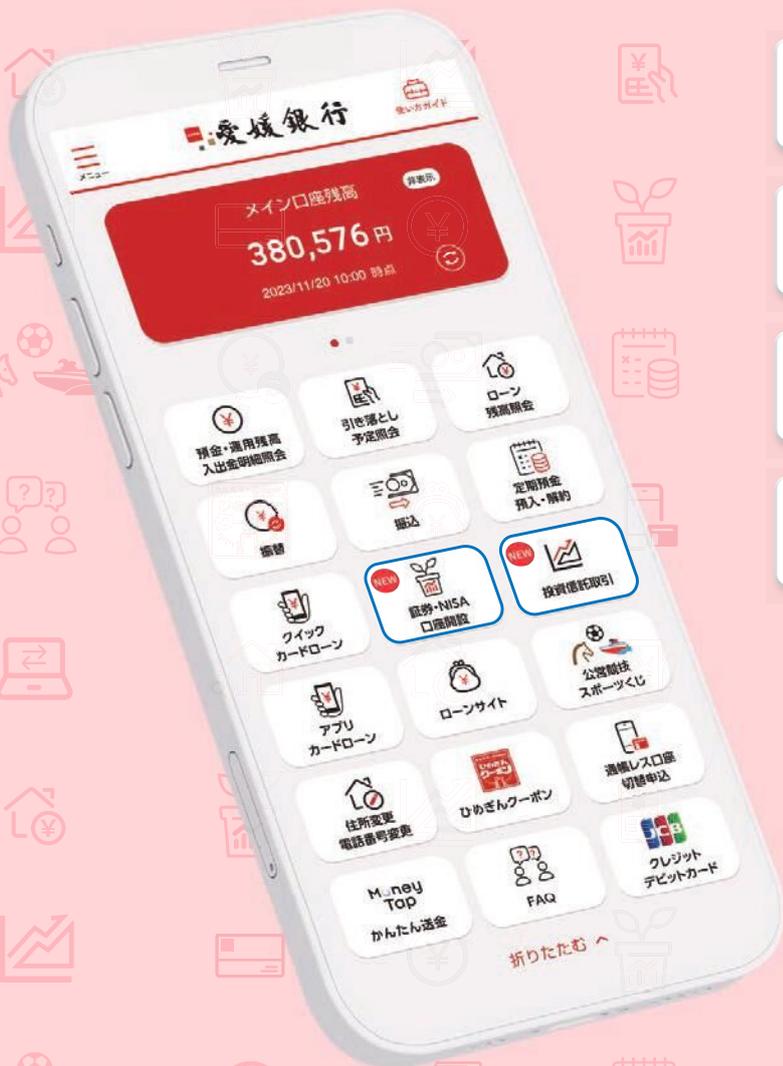
- AGENT
- HOME
- SAFETY
- LIFE
PALETTE

 **伊予銀行**
 IYO BANK

ひめぎん

ひめぎんアプリ

普通預金・投資信託・NISAの口座開設から投資信託売買まで、アプリで完結するサービスが増えてますます便利になりました!!



▶ 普通預金口座開設

▶ 投資信託口座開設
(証券口座開設)

▶ NISA口座開設

▶ 投資信託売買

ダウンロードは
こちらから



ひめぎん 愛媛銀行

商号等 | 株式会社 愛媛銀行 登録金融機関 四国財務局長(登金)第6号 加入協会 | 日本証券業協会

(2024年12月2日現在)

愛^{えがお}顔とは？

人と人との助け合い、

支え合いの根底にある「愛」と、

困難にくじけることなく挑戦し、

道が開けた時にこぼれる「笑顔」が

結ばれて生まれた言葉。

愛媛県は、

「愛^{えがお}顔あふれる愛媛県」を

目指しています。



知事あいさつ

愛媛県知事 中村 時広

本事業は、愛媛県が提唱する「愛顔」を全国に広く発信し、本県の知名度向上と愛媛ファンの獲得につなげるとともに、「愛顔あふれる愛媛県」の実現に向けた機運醸成を図るために実施しているもので、今回で11回目を迎えます。

今年度は、エピソード部門に42都道府県と2か国から4、267作品、写真部門に46都道府県から5、601作品の応募をいただき、審査委員長である俳優の伊ッセー尾形さん、俳優の神野紗希さん、そして私が最終審査を行ったほか、写真部門については、愛媛県美術会の方々にも御協力を賜りました。また、前年度エピソード部門の受賞作品を原作としたショートフィルムを募集する映像部門には、11都道府県から29作品の応募をいただき、審査委員長である映画プロデューサーの榎井省志さんをはじめ、ヒメブタの会代表の森幸一郎さん、漫画家の杉作J太郎さん、俳優の片岡礼子さんが最終審査を

行い、受賞作品を決定しました。

各賞に選ばれました皆さん、誠におめでとうございます。拝見した作品は、どれも「愛顔」と「感動」があふれる力作ぞろいで、選考には大変苦勞いたしました。中でも、エピソード部門で知事賞に輝いた二つの作品は、認知症をわずらう母と幼なじみの底抜けに明るかったかつての姿、自ら命を絶つた父に複雑な感情をかかえながらも前向きに生きる姿がえがかれた心温まるものがたりで、心揺さぶられました。

今年度の受賞作品をまとめた本作品集を多くの方々にご覧いただくことで、たくさん「愛顔」が生まれ、その輪が全国に大きく広がることを切に願っております。

終わりに、応募いただきました皆さまをはじめ、本事業に御協力を賜りました関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。

目次

「エピソード部門」(一般の部)

「知事賞」	カモメ対メダカの午後	長濱	眞理	(大阪府)	8
「特別賞」	ご飯のケーキ	益川	知実	(千葉県)	10
「優秀賞」	負けたよ…おまえには…	長谷川	潤	(滋賀県)	12
	コウレイシヤより愛をこめて	渡辺	廣之	(大阪府)	13
	専属美容師	藤川	香那	(愛媛県)	14
「入選」	好物	相野	正	(大阪府)	15
	優しさのリレー	加藤	聖子	(神奈川県)	16
	薄情な弟	藤中	湧也	(東京都)	17
	心がけ	浅見	こずえ	(埼玉県)	18
	お母さんのお買い物	樹	さおり	(静岡県)	19
「佳作」	紅まどんな	加藤	誉子	(大阪府)	20
	コーヒーちようだい、ブラックで	藤原	奈々	(愛媛県)	21
	とてもええ人やった	谷門	展法	(千葉県)	22
	ニーキュッパの女	佐々木	祥子	(福岡県)	23
	母からの手紙	末崎	政晃	(福岡県)	24
	推し活家族旅行	岩下	涼子	(兵庫県)	25
	またラジオの中で	永井	芳美	(愛媛県)	26
	逃げた鯉	高橋	彰子	(大阪府)	27
	尊敬する人	上農	多慶美	(石川県)	28
	しんださとし	尾木	直子	(滋賀県)	29

「エピソード部門」(高校生以下の部)

「知事賞」 僕が一番の味方

「特別賞」 あの日の母の笑顔

「優秀賞」 いびつな雑巾

ありがとうね、こころさん

僕らは支えられていたんだ

「入選」

声援

自分のスピードで

跡のない傷

祖父との宝物

姉妹

「写真部門」

『一般の部』

「知事賞」

仲良しこよし

「河原学園賞」

1年生になってもよろしくね

「優秀賞」

福の神

あア〜ん

じいじといっしょ

「入選」

心はずむ春

いつもありがとう

見つめ合う双子の女の子

笑顔

がんばったネ

『高校生以下の部』

「知事賞」

安らぎ

「河原学園賞」

まだまだ長生きしまっせ!

北川	晴揮	(愛媛県)	32
仲倉	玄瞬	(愛媛県)	34
中川	桃佳	(愛媛県)	36
濱本	こころ	(愛媛県)	37
谷	真乃介	(愛媛県)	38
北	光希	(愛媛県)	39
楠	一昌	(愛媛県)	40
富岡	乃亜	(愛媛県)	41
山内	菜々美	(愛媛県)	42
阿部	心咲	(愛媛県)	43

後藤	恵梨香	(岐阜県)	46
橋本	ゆりえ	(愛媛県)	46
加藤	佳代	(愛媛県)	47
原田	洋子	(愛媛県)	47
海田	佑希子	(愛媛県)	47
濱本	秀雄	(愛媛県)	48
塩崎	真央	(愛媛県)	48
宇和川	稔浩	(愛媛県)	48
白石	悠雅	(愛媛県)	49
岡野	成利	(千葉県)	49
杉山	暁飛	(愛知県)	50
鈴木	詩渚里	(愛知県)	50

『一般の部』

「愛媛県商工会議所連合会賞」 うんどうかい
 「愛媛広告協会賞」 変わらないもの

高岡 心美 (愛媛県) 51
 西山 樹 (東京都) 51

『高校生以下の部』

「愛媛県IT推進協会賞」 感謝
 「愛媛経済同友会賞」 かわいいお手伝いさん
 「愛媛県歯科医師会賞」 おいしい？
 「愛媛県獣医師会賞」 なかよし
 「愛媛県情報サービス産業協議会賞」
 「愛媛県理容生活衛生同業組合賞」 画面の先には

シヨートカット

魚崎 羽美 (愛媛県) 51
 安形 有生 (愛知県) 51
 廣部 美咲 (福井県) 52
 小松田 唯夏 (愛知県) 52
 尾作 万彩 (東京都) 52
 濱田 麻佑 (愛媛県) 52

「映像部門」

「グランプリ」 まっしゅん
 「準グランプリ」 小さな神様と私
 「優秀賞」 まっしゅん
 「入選」 ラブレター
 まゆつば
 しりとりの続き

「審査委員特別賞」

愛媛中央産業技術専門校チームまっしゅん (愛媛県) 54
 皆尾 裕 (愛媛県) 54
 新居浜市立東中学校美術部 (愛媛県) 54
 山川 麻美子 (神奈川県) 55
 永野 和哉 (東京都) 55
 大西 ひろし (大阪府) 55
 チーム四つ葉のクロローバー (愛媛県) 55
 四つ葉のクロローバー (愛媛県) 55
 ノーネームレター (大阪府) 55
 手帳の向こう (愛媛県) 55
 四つ葉のクロローバー (神奈川県) 55
 ゆかりとめぐる

「エピソード部門」一般の部

「知事賞」

カモメ対メダカの午後

長濱 眞理（大阪府）

母は、昭和一桁生まれ。世界恐慌の最中に生まれ、戦時体制の真っ只中で幼少期を送った女性である。お向かいのおばちゃんも同世代で、二人は幼い頃からのご近所さん。

二人は激動の時代を逞しく生き抜いた豪傑女性だけれど、九十歳を迎え、今度は新たな得体の知れない敵、認知症と戦うことになってしまった。

あんなに強かった二人なのに、九十年という歳月を戦い続けてきた脳は大層お疲れのようで、敵に攻め込まれている。

「しりとりとか頭の体操になってええらしいよ」我が家でお茶会をする二人に、提案してみる。

「アホらしいなあー。しりとりなんかせんでも私ら頭ええよなあー」

と二人は自信たっぷりと言う。

「いくでー。いくでー。ほな、メダカや」

「メダカかあ。カやな。カやな。カモメや」

「カモメかあ。メやな。メやな。そやなあ、ほな、メダカや」

「メダカかあ。カやな。カやな。そや、カモメや！」

「カモメかあ。メやな。メなあ。何があるかなあーそやなあー、メダカや！」

進まないし、終わらない。

九十歳認知症の乙女たちは、こうしてしばらく『カモメ対メダカ合戦』を笑い転げて楽しみ、生き活きと戦った。

そんな漫才のような日々は長く続かず、二人は徐々に認知症に侵略されていった。母は私を忘れていき、おばちゃんも脳梗塞を起こし倒れる。

時間は待ってくれない。母が私に問う。

「あなたのお母さんは元気にしてるんか？」ゼリーをひとくちスプーンですくって、泣きたい気持ちと笑顔を合わせ、母の口に運ぶ。

もう戻らない。あの底抜けに明るい穏やかな午後を思い出しながら、無邪気に笑う母の頬を優しく撫でた。

「特別賞」

ご飯のケーキ

益川 知実（千葉県）

当時、小学5年生の息子と1年生の娘をかかえたシングルマザーの私は、資格取得を目指し週に数回、子供たちに留守番をさせて夜間スクールに通っていました。

そんなある日、授業を終えて戻ると玄関に娘が立って通せん坊をします。はいはい、お母さんは疲れてるのよ、と心でつぶやきながら靴を脱いだ時、ダイニングの電気が消えました。もう、いたずらは勘弁してよ、と中に入るとテーブルの辺りがボクッと明るくなっています。

よく見ると、平たい洋皿にご飯をホールケーキの形にして、ふりかけをかけ、梅干や佃煮や漬物、それに刻んだ海苔を飾って、中央にはなんと仏様のろうそくを立てて火をつけています。

びっくりする私に、二人が手拍子を打ちながらハッピーバースデー

を歌ってくれるではありませんか。歌い終わり、ろうそくを吹き消して電気を付けると、テーブルには牛乳を入れたコップと二人の手作りバースデーカードと、そして、世界一のバースデーケーキが置かれてありました。

その頃の住まいはニュータウンの真ん中で住宅地域、近くに子供が買物に行けるような商店はなく、何よりシングルマザーになりたての私には子供たちに十分な小遣いを持たせる事もできませんでした。

そんな中で、私の留守中に二人が相談し合って「ケーキ」を飾り付けていたのかと思うと嬉しくて嬉しくて、この子たちの為に絶対頑張ろうと心に誓いました。

その後、二人は大学を卒業し、就職し家庭を持ち社会人になりました。私の還暦にはホテルで真っ赤なケーキを用意してくれ、料亭で古希の祝いもしてくれました。

でも、ごめんね、やっぱり私の誕生日の一番は、あの時のご飯のケーキなのよね。

「優秀賞」

負けたよ……おまえには……

長谷川 潤（滋賀県）

中学2年生の美術の授業。校内で一番厳しく恐い先生の授業は、画用紙の上を走る絵筆のかすかな音さえ聞こえない静寂に包まれ、教室の空気がピーンと張り詰めている。これほどまでに緊張感が漂う中で絵が描けるのかな……なんて思ったその時、異変に気づいた。体調を崩してしばらく入院し、前日から登校を始めたばかりのA子がお漏らしをした。そしてその刹那、ガッシャーン、ドタドターッ！耳をつん裂くような音と共にA子の隣に座るS君が机ごと床に転がった。A子の紺色のセーラー服はS君のパレットに出された絵の具や筆洗い容器の濁った水で見るとも無惨に汚れ、濡れてしまった。つい居眠りをして机ごと転んだと言いつくしたS君をまるで鬼のような形相の先生が雷のような大きな声で叱った。体操服に着替えて戻ってきたA子は、誰にも聞こえないような小さな声で「ありがとう」とS君に言った。S君はA子を見て何も言わずにわずかに微笑んだ。そして何事もなかったかのように美術の授業は続いた。この出来事の真相を知るのはA子とS君……

そして私だ。だけどS君もA子も二人だけの秘密だときっと思っている。あの時、あの瞬間、A子に恥ずかしい思いをさせないために先生に叱られることを覚悟の上、自作自演で自分を犠牲にしたS君……これまで経験したことのない事態に直面し、本当はA子のが好きだったのにアツと驚くだけで思考も体も硬直し全く何もできなかった自分……子どもながら、人として男として「負けた」と思った。絵の具で汚れたS君の制服が、何故か私には輝いて見えた。あれから30年の歳月が流れ学年9クラス合同の同窓会が開かれた。郷里から遠く離れた京都で警察官となった私は同窓会に初めて出席した。同じテーブルにA子さんが、少し離れたテーブルにはS君があの時と同じ笑顔で座っている。二人の面影は変わらない。変わっていたのは二人の姓が同じになっていたことだった。

「優秀賞」

コウレイシヤより愛をこめて

渡辺 廣之（大阪府）

国際線ターミナル。発着案内板の電光表示が、娘たちの乗る飛行機の「関空着」を告げる。一歳半。ビデオ通話の画面の中でしか会えなかった初孫と、やっと対面できる。新型コロナの余波を受け、パリで暮らす娘たちの里帰りがなかなか実現しなかったのだ。

待つこと約二十分。七年前、パリ暮らしを決意した娘を見送ったのもこの空港だった。ネイリストの職を見つけ、フランス人の彼氏と出会い、可愛い初孫が誕生した。……長いようで短かった七年間を振り返る私。

娘に抱かれた初孫は、愛想よく笑みを浮かべる。ビデオ通話の画面でよく見かける私の顔を、きっと覚えてくれたのだろう。しかし、言葉はまだ喋れなかった。

そんな初孫が、帰省中のひと月の間に、日本の言葉と話せるようになったのだ。デンチャ、ヒコーキ、キューキューチャ……。「パリへ帰ると日本の言葉は役に立たないのに」と、複雑な心境の私。その一方で娘は、「バイリンガルに育てたい」と、上機嫌だった。

そして、あれからもう一年。ビデオ通話の中で、二歳半になった初孫は、音程を外しながらも「はたらくるま」を歌ってくれる。日本語で覚えた車の種類も増え、床に並べたミニチュアカーで遊んだりしている。フランス語を話せない私には、初孫との対話はできない。初孫のいじるおもちゃを、「クレーン車、ミキサー車、消防車、はしご車」とたどって話しかけるのが精一杯である。

「お父さんももう高齢者なんだから」と、娘が私の体調を気遣う言葉を発したときである。初孫が対話に割り込んできて、「コウレイ車？」と興味津々、ビデオ通話の画面に食いついた。しかし映っていたのは、新たなはたらく「くるま」ではなく、もうはたらかない年金暮らしの「じいじ」だった。そんな初孫の仕草や表情が可愛い。あれ以来、ビデオ通話の向こうで、初孫は私を、笑顔で「コウレイシヤ」と呼ぶようになっていく。

「優秀賞」

専属美容師

藤川 香那（愛媛県）

父はあまり感情を出さない人。自分の気持ちを言葉にするのも得意なほうではないと思う。

高校生の頃私は美容師に憧れて、進路を決めた。

美容学校で髪の毛のカットを学び始めて間もなく、家に帰って「お父さんの髪切ってあげる！」と父に言った。

「おお！切ってくれるか？」と父は嬉しそうに言った。

思っていたより難しくてちょっと短くなり過ぎたところもあるけど、なんとか完成した。「ありがとうありがとう！さっぱりした！上等じゃ！こりゃあええ。」と父はとても喜んでくれた。

母は、「なんかここが短いけんズズメみたいになっとるよ」と笑ったが、父は「ええんよ。すぐ伸びるし、こうやってやりよううちにだんだん上手になるんじゃ。」と言って、「わしは専属美容師が付いとるんで。芸能人じゃ。」とニンマリ笑った。

父は、友達や知り合いに「髪切ったん？」「かなちゃんに切ってもらったん？」と聞かれては「ほうよ。わしや専

属美容師が付いとるけえ。ええじゃろう。」と笑って答えていた。

ふだん感情を出さない父が喜んでくれるのが嬉しくて、私は髪を切る事が大好きになった。

美容院に就職してからも、結婚して遠くに住むようになって、髪切ってもらおうかのう」と父が言うとなって、昔は硬くて毛量が多かったが、歳を取り毛量も少なくなった。病気のせいもあり、口数も減ったかなと思う。髪を切っている間は目を閉じてよく寝ている。

でも切り終わって、「できたよ」と声をかけると「あーサッパリした！ありがとありがと。気持ちがあええわ。良うなった。これで床屋も1ヶ月行かんでええど。」と愛顔で喜んでくれるのはずっと変わらない。

そしてリビングにいる母にこう言う。「どうじゃ。良うなったじゃろう。専属美容師が切ってくれたで。」私も言葉にするのは得意じゃないけれど、父への感謝や恩返し的气氛でこれからも父の髪を切る。ありがとうお父さん。

「入選」

好物

相野 正（大阪府）

亡き妻が夢にやって来た。

当初は向こうへ越したばかりで何かと忙しいのか、全く来なかった。最近は落ち着いたようでよく来る。だがその日の妻は切ない顔で何か言いたそうだった。

翌日は月命日。供物を用意しようとして不意にあることを思い出した。以前、お彼岸に京都の古刹で出会ったご婦人の言葉だ。

重そうに買物カートを引いて、墓地に通じる十数段の石段を見上げている九十年代と見える老女がいた。

私は「お持ちしましょうか」と声をかけた。

「すみません」と渡されたカートに和菓子が見える。

「重いですね」と正直に言っていると「主人の好物をたくさん持ってきましたから。」

そう言つて微笑む老女が少女のようにとても愛らしく、菓子を仲良く分け合うお二人が眼に浮かんだ。

涙腺が崩壊しそうになった。老いて私も、妻とそんな余生を送りたかったからだ。

「お気をつけて」「ご親切にありがとうございました」と

別れた老女が今でも心に残る。

思い出したのはその微笑みと好物だ。妻の大好物の上用饅頭は店が遠いので最近供えてやっていない。近くのスーパーの和菓子が済ませていた。深く反省した。

前夜の妻はきつと「久しぶりに美味しい上用饅頭が食べたいな」と言いたかったのだろう。急いで和菓子の老舗に行くと事前予約が要するという。残念そうな私に、その理由を聞いてくれた女将が、三十分待ってもらえば作れると言ってくれた。

できたての饅頭を持ち帰り、供えてやると妻は満足したのか、また来なくなった。

相変わらず食い意地が張ってるな、お母さん、と苦笑い。でも遺影はあの老女のような可愛い笑顔で「お父さん、大好物をありがとう」と言っている。

「入選」

優しさのリレー

加藤 聖子（神奈川県）

上京して間もない頃、人混みに圧倒され、駅のホームで気分が悪くなりました。

なんとか人混みを避けてしゃがみ込み、落ち着くのを待っていると、私より少し年上のお姉さんが近づき、近くの自販機で買ってきてくれた水を差し出してくれました。「このままじっとしている方が楽？」と尋ねられ、驚きつつも「はい」と力なく答えると、お姉さんは背中をさすって寄り添ってくれました。

ありがたいやら申し訳ない気持ちで「ごめんなさい」と呟いた私に、「謝らなくて大丈夫だよ」と安心させるように笑ってくれました。

まだ知り合いも少なく、不安で心細かったのだと気づき、私はようやく落ち着くことができました。

動けるようになった私を見たお姉さんは「気をつけてね」と声をかけ、小さく手を振ると、改札に向かって去っていきました。

それ以来、電車や道端で具合が悪そうな人を見かけるたび、あの日のお姉さんのように寄り添うことが私の習慣と

なりました。

あれから20年以上が経ち、駅のホームでうずくまっていた人を見かけ、水を買に行こうとした瞬間、私の後ろから誰かが駆け寄り、さらに別の人がお水を買に行く姿をみかけました。

昔のように自分がすぐに動けなくなっていることに少しショックを受け、友人にそのことを話すと、「それで、親切のバトンが次の人に渡ったってことなんじゃないの？」と、笑いながら言われました。

あの日、駅のホームで私を助けてくれたお姉さん。私より早く困っている人に寄り添うことのできる人たち。

そして、親切のバトンに気づかせてくれた友人。

困っている人の助けになりたいという気持ちだが、リレーのように受け継がれているのだと思うと、心がふっと、温かく感じました。

次はまた私がバトンを渡せる役目になりたいと、こっそり決意を新たにしています。

「入選」

薄情な弟

藤中 湧也（東京都）

兄の遺体を見ても、私は泣けなかった。

警察署の霊安室で横たわる青白い兄の顔は、どこか自分に似ていてゾツとした。私より九つ上とはいえ、兄はまだ三十前半だ。そんな兄の突然の訃報を聞いた時も、私は泣けなかった。

「起きや！ 帰るで」

母が兄をゆする。泣きじゃくって力のない声だった。揺らされた兄の顔は横を向き、だらつと唾液が垂れる。いつも厳しい父の目にも涙が浮かんでいた。見守る婦警さえも涙ぐんでいる。

この場で泣けない私は、薄情な人間だ。

兄は私が小さい頃に家を出たから、思い出が少ないのだ。心の中で泣けない言い訳を並べた。兄は幼少期の私を「ぶにすく」と呼び、可愛がっていた。意味のわからないあだ名だ。そんなくだらなしか思い出せない。

遺品を受け取り、兄を連れ帰ることになった。兄のスマホには絶えず通知が表示されていた。兄の恋人からのメッセージだった。返事がないことが心配なのだろう。事実を知らせたいが、ロックが外れず返事ができない。

私は兄の知り合いを当たり、彼女に連絡が取れる人を探すことにした。善意からではない。何かをしていれば自分の薄情さがマシになる気がしたのだ。

何件か当たると、兄の昔の職場を通じて彼女に連絡が繋がった。兄と彼女はそこで出会ったらしい。私は家を出たあとの兄のことを何も知らない。

翌朝、連絡を受けて飛んできた彼女は、兄を見てやはり泣いた。スマホが開かないことを話すと、「パスワードわかるかも」と、彼女は言う。

彼女が何かを打ち込むとあっけなくロックが開いた。パスワードは彼女の誕生日だった。私はなぜかここにはいけない気がして、客間の端で座り込んだ。

兄の彼女は遺体を見てひとしきり泣くと、兄のスマホを私に見せに来た。

「これ見て。弟さんの話よく聞いてた」

兄と私のLINEだ。よく見ると、私の表示名が「ぶにすく」で登録されている。思わず吹き出して、笑ってしまった。それと同時に初めて涙が溢れていた。

「入選」

心がけ

浅見 こそずえ（埼玉県）

「俺の母さん目が見えないからね」さらっと言った夫の言葉に何も言えませんでした。

「でも困った事は一度も無いよ」

その言葉にも何も言えませんでした。

当時、結婚を決めた直後、夫から言われた言葉にこの人と結婚してよいのか戸惑いと不安で心が行ったり来たりしていた日々でした。

暫くして、夫の家によばれました。私は「初めまして」と頭を下げました。すると盲目の女性が真っ直ぐ私の方を向いて「よく来てくれたねえ。何にもできないけどお昼を食べていって」と笑顔で言いました。

私は、戸惑いながら「はい」と一言だけ言いました。

「お待たせねえ」

「温かいうちに食べて」

出てきたのは打ち立ての中の広いうどんと出汁のきいた温かいお汁でした。

「目が見えないから大したことができなくて」と餡がぎっしり入った蒸かしたてのお饅頭を出してくれました。塩のきいた美味しいお饅頭でした。

私は温かい食事と気づかいにお腹も心も一杯になりました

た。

「今日は、来てくれてありがとう。おかげさまで楽しかった。」とお饅頭を包装紙にくるくるっと包み、満面の笑みで渡されました。

私はただ呆然と立ちすくみ「ありがとうございます。」と言ってお饅頭の包みを受け取りました。

「目は見えないけど、困る事は一度も無かったよ」と夫が言ったその言葉通りでした。

私は、偏見をもった自分が情けなく恥ずかしくしていたたまれませんでした。

私は少しの迷いもなく嫁ぎました。

嫁いで直ぐに義母から大切な宝を頂きました。

心がけです。

「いつも笑って」

「おかげさまの心を持つこと」

「ありがたいの言葉を忘れてはいけない」

義母は、初めて会ったあの日から天国に旅だった日までこの心がけ通りの人でした。

私はこの宝をしまっておくわけにはいきません。

そうです。子へ孫へと渡していかなければなりません。

「入選」

お母さんとお買い物

樹 さおり（静岡県）

小さい頃から、大好きな母とお買い物に行くことが大好きだった。

魚屋を営む実家では、母はいつも髪を振り乱して働き、世話をしてくれた。そんな忙しい母とお買い物は、母を仕事に取られず、独占できる数少ない時間だった。

ある日、私はお気に入りの赤い長靴を履き、飴玉しか入らないような小さなバックを片手に、母と洋服屋に行った。洋服屋に入り、暫くは、目新しい服がキラキラと輝いて見えて楽しかった。しかし、次第に飽きがきてしまい、ふとあることに気がついた。

お母さんは、「このスカートはどう?」「これも可愛いよ」と言ってお母さんのお洋服ばかりを選ぶ。なんで?どうしてお母さんは、お母さんのお洋服を見ないの?いらないのかな?

20数年後の今、この疑問の答え合わせができた。今年の春、満開の桜が見える病院で長女を出産し、赤い長靴が大好きだった女の子が母になったのだ。我が子は、信じられないくらいに可愛かった。

長女の1ヶ月検診が無事に済んだ頃、思ったよりも早いペースで気温が上昇し、暑い日が続いた。私は、赤ちゃんの夏服がないと思い、お買い物に出かけた。その時、ふと子供服の隣の婦人服売り場で、自分好みのワンピースを見かけた。「可愛いな」そう思い、何気なく値札を手に取る。子どもを産む前は、何とも思わない程の値段だっただろう。でも今は、「このワンピースをかうお金があったらこの子に可愛いお洋服を着せたい」と思い、そっと売り場に戻した。

その時、ふと小さい頃の「なんで?」の答えが見つかったような気がした。自分のお洋服がいらなわけじゃない。我が子に、自由に、好きなお洋服を着せたいんだ。そうか、私、お母さんになったんだ。私は、何だかくすぐったい気持ちになり、ふふっと笑った。

その日の夜、私はお母さんにこの温かい気持ちが伝わるよう、精一杯の「ありがとう」を電話で伝えた。それは、偶然にも母の日だった。

「佳作」

紅まどんな

加藤 誉子（大阪府）

その人は愛媛の人だった。娘を嫁に下さいと言った人は。「めでたいことじゃないか」とダンナは言ったが私の顔は曇った。最近の女性は結婚・出産しても働き続けるので子どもを預けやすいように実家近くに住む。上の娘がそうしてくれたので下の娘もそうするだろうと思いついて入った。

「愛媛なら大阪から近いし、彼の実家は果樹園らしいぞ。きつとおいしい果物を送ってくれるに違いない」

ダンナは能天気にはしゃいでいたが、その人は愛媛どころか娘を中国の上海へ連れて行ってしまった。彼が果樹園を継ぐのはずっと先で定年まで今の商社で働くらしい。その駐在先が上海だったのだ。「だまし討ちよ」ふくれる私に「滞在はどんなに長くても5年と言ってたじゃないか。それにも子どもができたら娘だけ帰してくれるそうだし」と、ダンナは心が広い。実はこれには理由がある。結婚前、娘は全く笑わなくなっていた。職場の人間関係、ハードなスケジュール、カスハラ。頭痛薬と胃薬と下痢止めと鎮痛剤、いろいろな薬を平行して常用し、ガリガリ

にやせてしまった。彼女が廃人になってしまうのではないかと、ダンナと2人こっそり病院を探し回っていた時愛媛の人が現れたのである。むしろ感謝しなければ。でもそんな状態だったからこそ手元に置いておきたかったのに。

私の心配をよそに上海へ行った娘は現地で職を得てばかり働き始めた。向こうから流れてくるSNSの中で娘が笑っている！娘は笑顔を取り戻したのだ。私の心も解け始めた。そんな時愛媛の人の実家から「紅まどんな」というみかんが届いた。おいしい。すごくおいしい。育てた人の愛情と手間暇を思い起こさせるあたたかな味がした。

「な、オレの言った通りだろ。」そう言ってダンナは三十年ぶりに私にウインクした。

「佳作」

コーヒーちょうだい、ブラックで

藤原 奈々（愛媛県）

のぶこさんが、来るようになって半年が経つ。

御歳⁹⁴。145センチの私よりも背が低い小柄なお婆あちゃんは、店の電気をつけるとすぐにやってくる。

「コーヒーちょうだい、ブラックで」席に着く前に、カウンター越しに声をかける。

母は、淹れたてのコーヒーを店の奥の仏壇に供え、のぶこさんのコーヒーを用意する。小さなお菓子を添える。湯気のたったコーヒーをおちょぼ口ですすりながら

「このコーヒーはなんでこんなにおいしいん？うちののは、スプーンに2杯お砂糖入れてもまだ苦い」

そう言っのぶこさんは笑う。その笑顔が、まるでいたずらっこのようで、私もついつられて笑ってしまう。恒例のやり取りである。子どもたちも、のぶこさんの口ぐせをすっかり覚えてしまった。

雨の日も風の日も、のぶこさんはやってくる。歩けなくなったから困るからと、朝から晩まで近所を散歩する。今年の夏は猛暑日が続いたが、熱中症警戒アラートもなんのその。散歩の合間に思い出しては、自動ドアを叩く。

「コーヒーちょうだい、ブラックで」

西日が照り付ける午後のことである。さすがに心配になつて、コーヒーだけでなくお茶や西瓜を出すようにした。「わあ！これが西瓜？写真でしか見たことないわ！」

のぶこさんは感激し、小さく切った西瓜を5切れ、あつという間に食べてしまった。「西瓜初めて食べた！こんなに美味しいもんじゃったんやなあ。ご馳走様。遠回りして帰る」家とは反対方向へ歩いていく。少しの間、後ろをついていき、家の方に向かうのを確認して店に戻る。「のぶこさん、今日は西瓜のこと、初めて食べたって言よったね」と娘が笑った。昨日は、「60年ぶりに食べた！」と話していたのを思い出したようだ。

その時、ドアを叩く音がした。のぶこさんが笑顔で立っている。

「コーヒーちょうだい、ブラックで」

私は、今日3回目のコーヒーとカルピスと西瓜を用意した。

「佳作」

とてもええ人やった

谷門 展法（千葉県）

三月、あなたは、逝きました。

高所から足を滑らせ落ちてしまい、体を強く打ち付けてしまったのが、原因でした。遠く離れている私は電話をし、痛うないかな？ と訊くと、痛みはないと、と答えました。

容体が急変し、私は帰省しました。間に合いませんでした。箱の中に収まるあなたを、現実と夢が振り合つたような不思議な気持ちで、見ました。涙は、出ませんでした。

看取ってくれた方に聞くと、神経がやられて、おそらく痛みは感じてなかった、とのことでした。母親は、安らがで、眠つちよるようやった、と言ひ、涙を溢れさせていました。

弱り切った母親の代わりに、喪主を務めることになりました。挨拶の中で、私は、気づいてみれば、あなたへの不平や不満のような言葉を口にしていました。酒を浴びるほど飲んで、母親を泣かせた。莫大な借金をして、母親を泣かせた。時折フラッと出かけたままで、母親を泣かせた。

口にしながら、涙が溢れていました。

しかし、その後、あなたを知る多くの人から、言葉をかけられました。祭りの時は、おまえのお父ちゃんがおらんと、始まらなんだ。おまえのお父ちゃんには、田んぼや畑を、よう手伝うてもろうて助かった。国の偉い人らに意見や文句を言うてくれるのは、おまえのお父ちゃんだけやった。……などの、言葉。

横つ面を張られたような、衝撃を受けました。私は、あなたを、よく知つたつもりで、まったく知っていませんでした。誰かを楽しませる為に酒を飲み、誰かを助ける為に借金をし、誰かを導く為に出かけていく、そんなあなたの像が、浮かんできました。

あなたが逝ってしまったて、初めて私は、あなたを、知りました。

謝つても、もう届かないかもしれないので、その代わりに、母親の言葉を、伝えます。

「優しくしてくれて、大事にしてくれて、笑わせてくれて、とてもええ人やった」

「佳作」

ニーキュツパの女

佐々木 祥子（福岡県）

三十四歳、私は結婚した。

「お前が結婚するときに渡そうと思つてな」

実家の押入れから父が何やら取り出してきた。先祖代々の真珠のネックレスか、それともコツコツ貯めた預金通帳か、ドラマだとそんなところだ。私は感動の態勢を整えた。が、父が持つてきた物は何やら黄ばんだ紙束だった。古本屋のような臭いすらする。何ならそのままゴミ箱に入れてしまふような代物だ。

「何これ」

「これはなあ、新聞つたい。生まれた日のな」

父の隣に母も座る。二人の目尻が下がる。思いもしない代物に拍子抜けしたが、うちの両親らしいなと思つた。状態も良く、三十四年間大切に保管してくれていたことがわかる。

「これを見ればな、お前が生まれた日のことがよくわかる。よくわかるよ」

父はその言葉だけを私に伝えた。たったそれだけの言葉だったけれど、十分だった。

「何で結婚のプレゼントがボロ新聞なんよ」
私は茶化した。が、ひとりになった時、泣いた。何かわからんけどめそめそ泣いた。

今の時代、何十年前の事だろうがすぐ知れる。当時の新聞だつて買える。だけどそういうことじゃない。この新聞は私が生まれた日の空気を知っている。その日私の誕生を喜び、将来を思う両親の温もりがこもっている。それはお金では買えない無二のものだ。

もつたない気がして、実は私はまだこの新聞を開いていない。だけど、ご丁寧に入っていたスーパリーのチラシは眺めた。当時、マヨネーズが一キロ破格の二九八円。

「お前が生まれた時はニーキュツパだったぞ」

思い出話をする時によく父は言う。

ねえ、お父さん、それって私の生まれた時の体重のことを冗談めかして言っていると思つていたけれど、まさか特売マヨネーズのことだったの？

いつか、父に確かめてみようと思つている。

「佳作」

母からの手紙

末崎 政晃（福岡県）

それまで実家暮らしだった僕は、大学を卒業して就職すると、ずっと煙たかった親と距離を取りたくて一人暮らしを始めた。

それでも、就職先が実家からそう遠くなかったこともあり、家族行事や法事など母からの誘いが何かと多かった。僕にとっては、そういうことも含めて、とにかく親が鬱陶しくて仕方がなかった。

そんな中、新たな経験を求めて転職。

上京する別れの日、母が「これ、読んで」と、僕に手紙を握らせた。羽田空港行きの飛行機に乗り込むと、そこには親と離れ清々した自分と、希望に燃える自分がいた。

離陸しようとするエンジン音で、母から渡された手紙のことを思い出して開封してみる。中には便箋が二枚。

「何も分かってあげられずに、ごめんね」

その一文を目にした瞬間、心の奥深くにあった緊張の糸がプツリと切れた。そして、堰を切ったように、止めどなく大粒の涙が溢れ出した。

僕が座る席は、機体中央の最前列。向かい合わせで着座している客室乗務員に、もろに見られている。恥ずかしい。それでも涙は溢れ続けた。

目を閉じて気持ちを整理する。

今まで母のことを、自分が正しいと全く揺るがない頑固者だと思っていた。しかし、手紙の中の母は、僕と同じように迷い葛藤している人だった。

母には、「自分の子どもなのに、あなたのことが分からない」という自覚があった。だからこそ、親子であり家族でいることを愛しむあまり、焦りと不安から僕を型にはめようと必死だったのだ。

そんな母を、僕はこれまで邪険に扱ってきた。それでも、いつも僕のことを気にかけていた母の想いを知ると、母への愛と感謝の気持ちで胸が一杯になった。

羽田空港について、トイレに向かう。手を洗いながらふと鏡を見ると、そこには何ともいえない愛顔が、僕に優しく微笑みかけていた。

「佳作」

推し活家族旅行

岩下 涼子（兵庫県）

私は夫と二人の娘を持つ四人家族だが、家族の状態というのは時期とともに変わる。

十年程前のこと、その頃、私たちは一人一人がそれぞれの方向を向き、家族として繋がる何かを失いかけていた。下の娘が高二、上が大学三回生になっていた。それぞれ私立へ進学し、私たち夫婦は懸命に働いていた時期だ。日々疲れ、夫婦の会話はほとんどなかった。子ども達は家に居ても自室で過ごすことが多く、唯一の食事時間もバラバラだった。

そんな時、次女から推し活で愛媛のライブハウスまで行きたいので、車で送ってくれないかという申し出があった。夫は運転好きで、長距離が苦にならない性格であるのを見越していたことだ。私は驚いたが、夫はすぐに詳しい場所を聞き出していた。八月の夏季休暇中だった。長女もライブに参戦することになり、私たち四人はその年の夏、何か、決して有名とは言えないとあるアイドルグループのライブ会場に向け、車を走らせたのだった。

外には景色が広がっていたが、子どもらはイヤホンで音楽や、スマホばかりと、味気ないものだった。現地到着後は娘たちを降ろし、私と夫はライブが終わるまでの時間を、周辺で費やすことになる。道後温泉周辺を歩き、土産物店を見て回り、甘味処で夫はコーヒー、私はみつ豆を食べた。最後に、温泉館前にあった足湯をした。竹垣の下は案外涼しく、湯が気持ち良かった。何を話すでもなく、ほっこりとした気分で娘らを迎えると、彼女らも久しぶりに無邪気な顔を見せて笑っていた。帰りは、まるで楽しい家族旅行の帰路のようだった。

図らずも、次女の推し活旅は、当時、忙しさに殺伐としていた私たちや、成長とともに離れていた姉妹に、家族らしさを蘇らせた。

帰るとまた、それぞれの日々だろう。しかし、いつでも戻れる家族という場所が、ちゃんとあるのだと確認でき、私はホッとした。行き先が、どこか懐かしさを感じる、愛媛であったことも良かったのだと思う。

「佳作」

またラジオの中で

永井 芳美（愛媛県）

「ラジオネームうなぎさん、私の父には今では笑える数々の強烈なエピソードがあります…」

そうあれは四年前わたしがラジオを聴くようになり、メッセージを読まれたことが始まり。

父は長女の私にそれはそれは干渉する人で、玄関先の黒電話で長話をすれば、用もないのに行ったり来たり、その相手が男子だった日には、その横に座る勢いで話しかけてきたりした。

忘れもしないその日は、気になっていた男子に映画に誘われ、こっそりバスで出かけ、そこで事件はおきたのだ。そうバス停に止まる度に、横付けされている父の車。挙げ句の果ては『バスから降りろ』って。運転手さんも他のお客さんもあんぐりで、恥ずかしいったらこの上ない。そうハンターだった父は野生の勘が働くのか、必ず私の悪戯を嗅ぎつける。私はそんな父が鬱陶しくて大嫌いだった。

なのになんで？このラジオの中の人は、『素敵なエピソードをありがとう映画の卒業を思い出したよ』と言った

のだ。なんだか不思議な気持ちのまま、それから父のエピソードを何度も何度も送るようになった。その度に、ラジオの中の人は私を感じていた父とは違う娘想いの父に聞こえるように読んでくれ、その上エピソードに合う音楽もかけてくれた。気がついたら、私は父を大好きな長女の立ち位置になっている。いやおかし大嫌いだったはずなのに。それでも懲りずに父のエピソードを出した。いつの間にか私が大嫌いだったというその感情はなくなっていた。なぜなら、私も同じように親バカで、いくつになっても子どもたちが、気になって気になって仕方ない母親になっっているから。そう間違いなく、あなたに見た目も中身もそっくりな娘です。あなたがいなくなっから十四年、私はラジオの中であなたとの思い出を聴くことが、いちばん嬉しい時間になっています。

じゃあね お父さん またラジオの中で。

「佳作」

逃げた鯉

高橋 彰子（大阪府）

息子の初節句に、鯉のほりをマンションのベランダに揚げようとしたその時だった。山から降りた風が吹き荒れ、三匹のうち一番小さな青い鯉が宙に舞ったかと思うと、ひらりと目の前から消えた。小さな鯉だけに息子がさらわれたようで、慌てて七階から下に降りる。くまなく探したが見つからないので、どこかのベランダに落ちたに違いない。越してきて半年経つが、面識があるのは最上階に住む大家さんと両隣の家族だけだ。でも躊躇う暇はない。うちの鯉を、いやうちの子を探さねば！と勇気を出して一軒ずつ訪ねた。

最初はしどろもどろの説明だったが、回を重ねると慣れてくるものだ。「あのう、うちの鯉がお邪魔していませんか？」と訊ねると、大抵クスッと笑い「ちょっと待って」の後に「無かったわ」と応えてくれた。しまいにはピンポンと鳴らしただけで「あつ、鯉でしょ。さっき見たけど無かったよ」と先に言われる始末だ。どこで聞いたのかと首をかしげていると、別の玄関が開き「鯉、見つかったみた

いだよ」と言われた。慌てて降りると、人が集まっていた。手招きされ見上げると、あちこちのベランダからも人が身を乗り出して同じ方を指差している。「捕まえた！」と大家さんが満面の笑みで三階のベランダから鯉をふりかざすと、拍手喝采が起きた。小さな鯉は、まるで大漁旗のように誇らしげにはためいている。主人に抱かれベランダに出て来た息子に、大きく手を振った。

降りて来た大家さんが「みんな心配して探してくれてね。さっきのお宅に引つかかっているのを見つけてくれたんだよ」と教えてくれた。留守だったので大家さんが電話を入れると、「また飛んでいくといけないから、合鍵で入って取ってあげて」と住人の方が親切にも頼んでくれたそうだ。

おかげで我が家の鯉は無事に帰宅し、それからはマンションの人達に「鯉の人」と声をかけられるようになった。風の神様のいたずらは、思いがけない幸せを運んでくれた。

「佳作」

尊敬する人

上農 多慶美（石川県）

今から十三年前の三月十一日。津波でめっちゃめっちゃになったふるさと、閑上。立ち入りの規制が解除された五月に、英おんちゃん（叔父）の位牌がどうしても見つからない、と地元の妹から連絡がきた。その夜すぐに、金沢から仙台行きのバスに乗った。

英おんちゃん。亡き母の弟で、名は英雄。震災以前に六十五歳で逝ってしまったが、私たち四人姉弟は、成人してからもずっと英おんちゃんと呼び、とても慕っていた。

優しくて穏やかで、ユーモアがあつて人をよく笑わせる。ピンチの時にはスーパーマンのごとく現れて助けてくれる。そして、とびきりのやわらかな笑顔の持ち主。

バスの揺れのなか、その叔父を想った。進学の夢をあきらめ、相愛の人とも別れ、長男のかわりに和菓子屋を継いだ、と叔母たちから聞いていた。

私が受験生だった頃、一度だけ聞いたことがある。なぜ夢をあきらめたのか、と。叔父は「おれが継がねがったら、こんなふうな万頭つぐる人いなくなっぺえ」と、お

どけた声音で言い、できたてのほかほか万頭をくれたのだった…。

津波のあとの閑上は酷かった。二ヶ月すぎてもぐちゃぐちゃのまま。この日の空と海が青くて、切なかった。

誰かの車が突っ込んだままの店先から順に位牌を探し始める。異臭のなか、瓦礫をどかしながら。蒸し暑さと息苦しきで汗が吹き出す。…三時間を過ぎても見つからない。

英おんちゃんは自由になって、さつき見た静かな海をゆったり漂っているのだろうか、と思った時「あつたあ！」と妹の声。汚泥に埋もれた仏壇の裏に、密着していた。

叔父の享年を過ぎた今、つくづく思う。生きていく上で、自分が選べることはほんのわずか。それさえ与えられるべくして与えられた道。それを肯定し、深く慈しめる人が、英おんちゃんのような笑顔になれるのだ、と。

「佳作」

しんださとし

「あ、『しんださとし』や！」

久しぶりにしたWii Uの野球ゲーム。敵チームのバスターボックスに「しんださとし」と名付けられたキャラクターが立っている。

グレーの髪に四角い顔、目を細めて笑っている「しんださとし」は、父「睿」の死後にゲーム機で作られたキャラクターだ。

Wii Uにはカメラが搭載されていて、顔を撮影すると、自分の分身「Mii」を作ることができた。コンピューターで作られた「Mii」は、顔型、口元などうまく特徴をとらえたアニメーションだ。子どもたちは「Mii」作りに夢中になり、ゲーム機には、私、夫、近所に住む父と母と祖母の「Mii」も登録された。自分で「Mii」を動かしてゲームをすることもできたが、それよりも、対戦相手に、登録した「Mii」がふいに出てくるからおもしろかった。

「しんださとし」もそうした中で、登場したわけである。

八年前の夏。

父は旅先であっけなく逝ってしまった。

尾木 直子（滋賀県）

またたく間に居間に祭壇が作られ、花が飾られ、線香が焚かれた。父は写真に閉じ込められ、何も話さない存在になってしまった。

何日かして、子どもたちが二つ目の「Mii」を作り始めた。自分たち、私、夫、母、祖母。生きている家族の「Mii」を作り終えた後、長男は「おじいちゃんも作るわ」と、遺影を撮影した。

「そんなことしたら罰があたる」と言う私のことなどおかないなしに、ゲーム機は遺影をきちんと「顔」と認識し、なんの違和感もなく、生きていたころより心持ち優しくな父の「Mii」を作り出した。

それは、とても不思議な感覚だった。

「名前は『しんださとし』やな」

子どもたちはケロケロと笑い合い、新しい父の「Mii」を登録した。

この夏、何年かぶりにスイッチを入れたゲーム機の中で、「しんださとし」にホームランを打たれた。元気そうで、ちよつと泣けた。

デジタルプラン

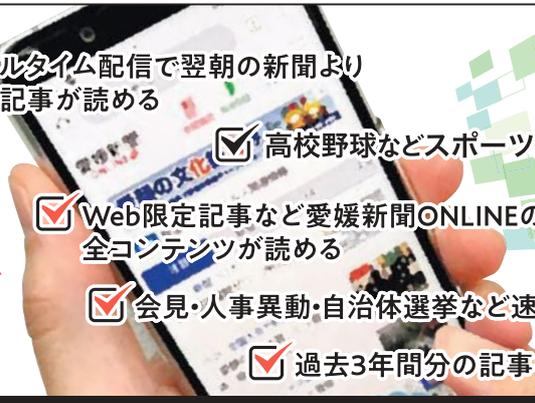
☑ リアルタイム配信で翌朝の新聞より早く記事が読める

☑ 高校野球などスポーツ充実

☑ Web限定記事など愛媛新聞ONLINEの全コンテンツが読める

☑ 会見・人事異動・自治体選挙など速報の充実

☑ 過去3年間分の記事を検索



(個人会員) 月額プラン
¥1,980

(法人会員) 年間プラン
¥21,384
(1~5アカウントの場合)



愛媛新聞社編集局「デジタルプラン」係
E-mail media.info@ehime-np.co.jp
TEL 089 (935) 2253 (平日9:00~17:00)



未来へ。
咲く、
きずな、

地域に根ざす、
信用金庫として。
手から手へ。
心から心へと。
つなげてゆきたい
想いがあります。



「愛」ある街のホームドクター

愛媛信用金庫

『地域とともに、未来をえがく』

住友金属鉱山株式会社
住友化学株式会社
住友重機工業株式会社
住友共同電力株式会社
住友林業株式会社
三井住友建設株式会社



安心と信頼の絆で、
未来に寄り添う。

くらしの保障、相談するなら



※ご加入にあたりましては、お近くのJAへお問い合わせください。
どなたでもご相談いただけます。

■JA共済ホームページアドレス <https://www.ja-kyosai.or.jp>

「エピソード部門」高校生以下の部

「知事賞」

僕の一番の味方

北川 晴揮（愛媛県）

「天才肌でええオトコになれよ」

たったこれだけ。父から僕への最後の手紙だった。父が生きているのが辛くて逃げ出したこの世で、父が自ら死んでしまったという人生最悪な出来事を僕に背負わせて、何で僕には前向きに生きろみたいな無責任な手紙を残すのか。二年前の春からずっと、怒りなのか悲しみなのかよくわからない感情でぐちゃぐちゃだった。

「お父さんがどんな風に死んだかじゃなくて、どんな風に生きとったかを思い出してみて。」

しばらく経ったある日、祖母が言った。

真面目で優しく、ちょっと冗談が通じないところがあって、でも自分が冗談を言うのは好きで、自分で言っただけで自分で大笑いしている、ちよっと変わった人だった。

僕がまだ幼い頃、友達の輪の中に入って遊ぶのを嫌がって一人で居たがるのを、母が心配して父に相談したことがあった。父は、

「晴揮は天才肌やけん。天才は子どもの頃からちよつと変わつとるんよ。将来が楽しみやな。」

と笑っていた。今思い返すと、何かの度にそう言つて僕に笑い掛けてくれていた。天才なわけないやん。と思いつながらも、僕も悪い気はしていなかったのを覚えている。そうだった。僕はきつと、ずっと父の言葉で、父の笑顔で支えられていたんだ。だから僕の味方である大切な父を失つて、すごく辛いんだ。そう実感すると、涙が止まらなかつた。ただ心は少しだけ軽くなつた気がする。

今も父には怒っている。父に会えないのが辛い。でも、父の言葉や笑顔を思い出すと、頑張ろうと前を向ける。頑張つて生きる僕を、父もどこかで笑つて見てくれているかもしれない。

「特別賞」

あの日の母の笑顔

仲倉 玄瞬（愛媛県）

私は小さい頃、父と母を病気で亡くしている。父は、私が産まれてわずか三ヶ月で脳出血を患って亡くなった。そのため声や性格などもわからない、顔だって写真を見て初めて知った。それと違って母は、私が小学一年生の時に癌で亡くなった、そのため顔や性格、声なども覚えていた。しかし一番しっかりと覚えているのは、亡くなった時の母の表情だ。その時の表情は、言葉では表しにくいのが、とにかく爽やかに笑っていた。私にはその笑顔の中に数えきれないほどの思いがあると思っている。両親がいないということもあり、辛いとか、寂しいな、などと思うこともあった。そんな時に母の笑顔を思い出すと、「父と母が空から見守ってくれているから明日からも頑張ろう」と、前向きな気持ちにさせてくれる。母の笑顔には、何回も救われた。

私が中学二年生のある夜、いつものように布団へ入った。その日は疲

れていたということもあってすぐに寝てしまった。目が覚めたと思ったら、そこには母が立っていた。私はびっくりしていたが、七年ぶりに母に出会えたと思い、本当にうれしかった。その時の母は私に何かを言うわけでもなく、ただただ私を見つめて爽やかに笑っていた。そして気づくと朝になっていた。私はいつもなら夢を見ても次の日には、忘れることがほとんどだ。しかしこの夢はしっかりと覚えていた。なぜ昨日、母が夢に出てきたのだろうと不思議に思っていた。その日は八月十五日、母の命日だった。母は、私のことを心配して夢に出てきたのだと思った。私は仏壇へ行き手を合わせて、「心配してくれてありがとう」と呟いた。私は母の笑顔を見て、笑顔は人の心をあたたかくすることのできるうつくしいものだと思った。

私は、夢を見た日から誰に対しても笑顔で接することを意識している。

「優秀賞」

いびつな雑巾

中川 桃佳（愛媛県）

母が亡くなってから父と二人暮らしを始めることになった。突然のことで、感情の整理が追いつかなかった。一番身近で支えてくれていた母がいなくなつてから、感情をコントロールするのが難しくなった。苦しいのは私だけじゃないのに、思春期なのもあいまって、父へ対して強く当たつてしまうようになった。そのたびに素直になれない自分が嫌で、申し訳ないという罪悪感があった。それでも、父はいつも通り気さくに話してくれていた。

「明日雑巾持っていかないかんのやけど、どうしよ。」これは始業式前日の夜に私が父に言った言葉だ。次の日が始業式だということを忘れていた私は、雑巾が二枚必要だということに気付いた。急いで父に話したが、夜遅くだったためお店はどこも閉まっている状態で、買いに行くこともできず、正直に先生に言うしかないと思い、諦めて次の日を迎えた。次の日の朝、父はいつも通り仕事で私より家を出る時間が早いため、もう家を出ていた。リビングへ行く時、そこには母が使っていたミシンと、父が縫ってくれた

であろう縫い目がいびつな雑巾が置かれていた。おそらく私が寝ている間にミシンで作ってくれたのだろう。私はすぐくうれしかった。父は決して裁縫が得意ではない。得意ではない裁縫を不器用ながらしてくれていたと思うと、申し訳なさと同時に感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

母が亡くなってから、もう一年が過ぎ、何不自由なく幸せに暮らせていた頃には戻れなくても、幸せに暮らせるように支えてくれる父にはとても感謝している。私は、今はまだ愛情を注いでもらう側だけど、これからたくさん親孝行して、父を何不自由なく暮らせるように支えてくれる人間になりたいと思う。

「優秀賞」

ありがとうね、こころさん

濱本 こころ（愛媛県）

「私、あなたのおかげで楽しかったわあ。ありがとうね、こころさん。」

護士さんにとっては嬉しいことなんだ、と私はそこでやるとやりがいを感じた。

私のまだまだ短い人生の中で、心から嬉しかった言葉だ。中学生のとき、職場体験で老人ホームへ一週間うかがったことがある。そこには、遊ぶのが大好きな人、昼食をとっても楽しみに待っている人、おしゃべりするのが大好きな人など、いろいろなおじいちゃん、おばあちゃんがいた。その中に、認知症が進んでいて、名前も覚えられないようなおばあちゃんがいた。何度も自己紹介をして、何度も同じ話をしなくてはならない。毎日同じことの繰り返しで、正直嫌気がさしていた。それが職員の方に伝わってしまったのか、「あのおばあちゃんは、長く一緒にいる私たちの名前もあやふやなんよ。」と小さな声で言われた。「でも、名前を覚えてくれなくても、楽しそうにおしゃべりしてくれるのが嬉しくて私たちも頑張れるんですよ。こころちゃんも、あと少しの間頑張ってくれん？」とお願いをされた。そうか、覚えられなくなったら、こうやって関わることが、介

それからは「一緒にお話しましょう。」「ボールを使って遊びましょう。」と、関係を深めたいという一心で、おばあちゃんとの時間を過ごした。そして最終日、おばあちゃんに、「今日で職場体験が終わります。五日間とても楽しかったです。本当にありがとう、おばあちゃん。」と挨拶した。そして返ってきた言葉が、「ありがとうね、こころさん。」だった。私は感動して、思わず涙を流した。職員さんも、驚いたような、感動したような顔で、目を合わせていた。認知症のおばあちゃんが、名前を覚えてくれたのだ。おばあちゃんはもう、私の名前を忘れてしまったかもしれない。でも私はあの時の感動を、忘れることはないだろう。

「優秀賞」

僕らは支えられていたんだ

谷 真乃介（愛媛県）

「僕らはみんな生きています。生きていますから嬉しいんだ。」これは、僕の大好きな歌だ。この歌の意味を痛感する日が来るなんて。

僕の「行ってきます」「ただいま」を待っている家族の笑顔。それが壊れたあの日のことは、あまり思い出したくない。しかし僕が前より強くなった日だから、しっかりと心に刻んでおきたい。

僕は昔から健康で、幼稚園では皆勤賞をもらった。毎日学校へ行き、習い事など、とにかく楽しい日々を過ごしていた。ところが、四年生の一学期、ものすごいだるさに襲われた。家族が心配したけど、僕はその日も頑張って学校へ行った。でも、友達みんなが話す声の大きさに、僕は目が回り、倒れそうになった。僕は、小学校生活で初めて早退をした。

次の日、大きい病院へ連れて行ってもらった。強がってはいっても、正直、注射は大嫌いだ。病気を調べる検査が始まった。綿棒を鼻につっこまれたり、頭の上に機械が来た

りと、一つの検査が終わるたびに、次はどんな検査をするだろうと怖くなった。長い検査を僕は頑張った。今までで一番、自分が誇らしく、根性があるなとほめてやりたかった。

僕は、入院することになった。何の病気かわからないままで不安だった。このまま一年くらい入院するのだろうか。けれど僕は、元気を取り戻した。家族からのほげまし、先生や友達からの手紙。こんなにも多くの人に支えられていたんだと感じた。

心が元気になると、やりたいことが浮かんできた。もう一度バスケットがしたい。弟や妹と公園へ行きたい。じいじの家に行きたい。もう一度僕に健康になるチャンスください。僕は、たくさん薬や注射に耐えた。

僕は、生きています。元気になったから今日も笑っている。ありがとう。元気な体は、きつと世界中に笑顔の花を咲かせるのだ。これからも僕は、この体を大切に生きていきたい。

「入選」

声援

北 光希（愛媛県）

僕は、耳が聞こえない。いわゆる「障がい者」だ。補聴器を付ければ、聞こえるようになるが、外すとほとんど何も聞こえなくなる。そんな僕は幼稚園の頃から姉の影響で空手を始めた。

空手というと、型や組手など様々な種類があるが、僕は組手をしている。組手は、相手の打撃や蹴りを体で受ける。そのため、補聴器に相手の攻撃が当たってしまうと壊れてしまう。だから、補聴器を外しほとんど無音の世界で空手をすることになる。試合では、審判の声や応援の声も聞こえない。そんな状況で僕は空手をしている。

空手を始めたばかりの頃は練習をあまり真面目に取り組まなかったため、試合でいつもすぐに負けていた。しかし、負けん気が強かった僕は、試合で負けたくなく真剣に練習に取り組むようになり小学校四年生で初めて出場した全国大会で準優勝という立派な成績を残せた。そこから毎年全国大会へ出場するようになったが、いつもあと一步のところまで優勝できずに高校一年生になった。高校生になる

と勉強のこともあり、忙しくなるため、高校一年生の全国大会がラストチャンスの気もちで出場した。試合は順調に勝ち進み、小学校四年生以来の決勝に進出できた。いよいよ迎えた決勝戦。僕が試合のコートに行こうとした時、初めての間違った。補聴器を外しているのに、声援が聞こえたのだ。同じ道場の皆が僕の事を大きな声で応援してくれたのだ。その皆の力を借りて、初めて優勝することができた。

僕は今でも、あの時間こえた声援が忘れられない。僕はその時、応援の力の大きさがどんなものなのか初めて分かった。あの時応援してくれた皆に感謝をして、今度は逆に僕が応援して、力に変えられるようにしたい。

「入選」

自分のスピードで

楠 一昌（愛媛県）

あれは僕が中学二年生のときだった。僕はとても面倒な性格をしていると自分でも思う。一度言われたことを何度も何度も気にしたり、他の人が怒られて言われていることをまるで自分に言われているように感じたりしてしまう。

僕は精神面が非常に弱いのだ。普段だったら、少し落ち込む程度だったが、このときは違った。自分の中で積みもりに積みもって耐えきれなくなった。自分というものの自体が粉々に壊れてしまったような気がした。

そこから僕は学校に行きたくなくなった。いや、行けなかった。朝が起きられなくなり、まるで僕の上に何か乗っているかのように体が重くなった。動くことがしんどいと思うようになった。

僕は何日か学校を休んだ。一日中家の中にいて、もぬけの殻のようになっていた。そんなとき、僕が小学六年生だったときの担任の先生が家に来た。後で話を聞くと、僕の姿を見かねた祖母が元氣を出さしてほしいと先生を呼んだそうだ。そこで先生は次のようなことを言ってくれた。

「今は休みをチャージしよるから何も気にすることはない。でも、このままずっとこうだったら君の将来の可能性が無くなってしまいかもしれない。だから、自分のスピードで進んでいけばいい。僕も応援してるから。」僕はこの言葉に一気に救われた。

僕はそこから学校に復帰した。すぐには元に戻れなかったし、今でも完全には戻っていないと思う。でも、僕は自分のスピードで進んでいくことを決めた。

先生ありがとう。今も自分のスピードで進んで頑張っています。僕はあれから、先生のような先生になりたいと思いました。僕のような子を助けてあげたいなって。じゃあ先生、次は良い知らせで先生のところに行きます。それまで、またね。

「入選」

跡のない傷

富岡 乃亜（愛媛県）

私は小学四年生の頃、当時の友人と遊びに行く道中に交通事故に遭った。住宅街の細い道を横断する際に、直進してきた軽トラックと衝突したのだ。この事故で鼻を骨折し、左の頬に直径十センチメートル程の傷を負った。ヘルメットのおかげで頭にけがをせず現在も元気に過ごせているのは不幸中の幸いだと思う。

当時の私は顔にできたタイヤの跡のような大きな切り傷がたまらなく嫌だった。友人に嫌われてしまうことが怖かった。大好きな学校に、初めて行きたくないと思った。集団登校ができなかった私は、母と一緒に正門をくぐった。顔を伏せていた私の前にはいくつもの見覚えのある靴が並んだ。ゆっくりと視線を上げるといつもと変わらない笑顔が浮かべた友人がたくさんいた。「久しぶり、はやく教室行こ」「待ってたよ」など普段通りのおしゃべりをするだけで、私が恐れていた悪口は一つもなかった。他の学年の子たちも「アニメの傷みたいでかっこいい」とキラキラした笑顔を向けてくれた。そんなみんなの笑顔を見てい

ると私もどんどん楽しくなり、傷があることすら忘れてしまうほどたくさん笑うことができた。家に帰ってそのことを話すと母は「やっぱね」という顔をして、「あなたの友達が傷一つで人を嫌うような子なわけがないでしょ。」と言った。このとき私は友人と学校がもっと大好きになったのだ。

事故が原因で自転車に乗ることがトラウマになってもおかしくなかった。しかし、友人が毎日遊ぼうと誘ってくれたおかげで今でも毎日自転車で通学している。もちろんヘルメットを被って。大きな傷は跡形もなくきれいに治り、つるつるほっぺになったが、事故後初めての登校日のことは鮮明に覚えている。これからも忘れることはないだろう。あの日の朝、傷だけでなく私自身を見て笑いあった友人たちとは今でもとても仲良しだ。この縁をこれからもずっと大切にしていきたい。

「入選」

祖父との宝物

山内 菜々美（愛媛県）

私が小学生の頃、祖父と過ごした一つの夏の日が、今でも心に深く残っています。祖父は私にとって、家族の中で最も尊敬する存在であり、優しさと知恵を持ち合わせた人でした。その日、祖父と二人で近くの山へハイキングに出かけました。

祖父はいつも自然を愛しており、山に行くたびに色々な植物や動物の話をしてくれました。私も祖父と一緒にいると、自然がどれだけ素晴らしいものかを感じることができました。山道を歩きながら、祖父は草花の名前を教えてくださいました。小鳥の鳴き声に耳を傾けたりと、自然の美しさを共有してくれました。

その日のことは特に鮮明に覚えています。山の頂上に着いた時、私たちは大きな岩の上に座り込み、広がる景色を眺めました。眼下には緑豊かな森が広がり、遠くには青い空と山々が続いていました。風が心地よく、まるで時間が止まったかのように感じました。祖父はふと静かに、「この景色を忘れないように」と言いました。そして、「人生

には、時々こうして立ち止まって、自分がどこにいるのか、何をしているのかを考えることが大切だ」と続けました。幼い私にはその言葉の深さがすぐには理解できなかったかもしれませんが、その瞬間、祖父の言葉と優しい眼差しが私の心に深く刻まれました。

それから数年後、祖父は病気で亡くなりました。悲しみの中で、私は祖父との最後のハイキングのことを何度も思い出しました。彼が教えてくれた自然の美しさと、人生の大切さについての教えは、今でも私の中で生き続けています。祖父の言葉は、困難に直面した時や、人生の岐路に立った時に私を支えてくれる大切な指針となっています。

祖父とのその一日が、私にとっての大切な宝物であり、彼との思い出を通して、私は人生の真の価値を学びました。このエピソードを思い出すたびに、心が温かくなり、祖父がいつもそばにいてくれるような気がします。

「入選」

姉妹

阿部 心咲（愛媛県）

姉が結婚するらしい。高校に入学して二回目の夏が始まった頃、そう聞かされた。私は十六にもなって姉離れができない。結婚なんて絶対許すものか。そんな事を本人に言えるわけもなく。かと言って素直に「おめでとう」を贈れるほど大人じゃない。昔と違い遠く離れた地に住む姉が何を思っているのか、私にはもう知る由もないのだ。

姉と私は十も歳が離れている。故に幼い頃からずっと姉に甘えて、憧れて、そして頼りにしていた。そんな姉との距離が変わり始めたのは私が中学に入った頃からだった。姉が社会人になり、そして上京し、仕事が忙しくなり連絡する回数が減っていった。私は姉が遠い存在になるのが怖かった。東京での暮らしや多くの人と関わる事によって「妹」の存在が薄れるのではと不安を抱いた。結婚。いずれはするのだろうかと思いはしていたつもりだった。けれどそれはもっと遠い未来の話で、私をもっと大人になれてからの話で。どうやら私は姉の前では永遠に大人になれない

ようだ。

姉は新しい家族を築いて、いずれは子供ができて、これから忙しい日々を送ることになるだろう。姉が誰かの「母親」になるのは正直、非常に憤懣やるかたなく感じるのだが、そこは話すとキリがないので割愛する。遠く離れた地で新しい家庭を築いていく姿を想像しながら私は少しづつ大人もどきになっていく。これからも私の複雑な妹心を伝える事はきつとないのだろう。どうか今のまま私の身勝手な嫉妬には気づかないでほしい。貴女を一番応援しているのも妹であるこの私だから、今はただ大人しく結婚式に着る服を選別することにする。果たしてそこで平常心を保てるかどうかは怪しいが。その時は心からの「おめでとう」を。貴女の妹より。



みんなの、すくそばで働くものだから。
 ひとの肌にも、直接ふれるものだから。
 私たちエリエールは、
 なによりも「品質」にこだわっていきます。
 「どこまで人間にやさしくできるか」を
 追い求めていきます。
 ひとりひとりの幸せと、
 そんな「スキャンシップ」を通して、
 深くかかわっていきます。
 「やさしく触れていいですか？」
 この問いに、世界中のすべての人から、
 力強い「Yes!」をもらえるように。
 気持ちのために。
 からだのために。
 そして地球のために。
 エリエールの
 「やさしさへの挑戦」は続きます。



大王製紙株式会社 <https://www.elleair.jp>

この星と人のチカラに。



四国事業所 愛媛県今治市菊間町

太陽石油 SOLA TO

地元、
 新しいつながりを。



地元の良さってなんでしょう？それはきっと、みんなのつながり。
 おじいちゃんも、おばあちゃんも、若者も、子育て世代も、
 みんながちゃんとつながっている。
 私たちは、スーパーマーケットとしてそのつながりを進化させたい。
 お買い物だけでなく、お店にふらりと来てほしい。
 おしゃべりをしたり、一緒に街のことを考えて、
 新しいドキドキやワクワクを生み出していきたい。
 モノを買う以上の新しい体験で、みんなをつなげていく。
 私たちの挑戦は、もうはじまっています。

株式会社フジ FUJI

〈本社所在地〉〒732-0814 広島県広島市南区段原南1-3-52

愛顔感動ものがたり
 公式ホームページでは
 過去の全受賞作品を
 ご覧いただけます。
 作品募集やイベントなど
 最新情報も発信しています。

愛顔
 感動ものがたり

大募集

エピソード 写真 映像 大募集!!



「写真部門」



知事賞

仲良しこよし

後藤 恵梨香（岐阜県）

とっても仲良しな2人！ひ孫の成長をいつも優しく見守ってくれてありがとうね！



河原学園賞

1年生になってもよろしくね

橋本 ゆりえ（愛媛県）

桜が咲いた3月。近くの公園に行き、記念に写真を撮りました。この4月から小学校に入学した息子。ウキウキ、ワクワクいっぱい。だけど不安も少し。これからもずっと応援しているからね。

優秀賞



福の神

加藤 佳代 (愛媛県)

むっちむちだった生後9ヶ月。見てるこっちまで自然と笑顔になる写真です。現在4歳になった僕。周りをほっこりさせるこの笑顔は変わらず健在です。



じいじといっしょ

海田 佑希子 (愛媛県)

いつもたくさん遊んでくれるじいじの倉庫に行ったよ。みかんを入れて運ぶころころにのせてもらってごまんえつ!



あア〜ん

原田 洋子 (愛知県)

扇風機に向かって「あーん」。扇風機には今も昔も変わらぬ楽しみ方がありました。

入 選



いつもありがとう

塩崎 真央（愛媛県）

還暦のお祝いに家族16人で旅行に行きました。サプライズでチャンチャンコ、孫からの似顔絵などのプレゼントと、とてもいい思い出が出来たかなと思います。みんなの笑顔が溢れた家族旅行になりました。おじいちゃん、おばあちゃん、これからもずっと元気でいてね!!



心はずむ春

濱本 秀雄（愛媛県）

わが町自慢の桜園に母親と共にお花見に訪れた双子ちゃん。出会ってから小一時間、そろそろ帰り支度をする頃になってようやくお揃いのとびっきりの愛顔で答えてくれました。

見つめ合う双子の女の子

宇和川 稔浩（愛媛県）

我が家にも待望の赤ちゃんがやってきました。しかも一卵性の女の子。双子なので大変さも二倍ですが嬉しさと可愛さは二倍以上です。写真はまだ寝返りもできない頃ですが、まるで鏡のように同じ顔が向き合い、同じタイミングで笑っている瞬間です。



入 選

笑顔

白石 悠雅（愛媛県）

年の離れた双子のいこです。無邪気な笑顔や純粋な表情は会うたびに私を癒してくれます。これからもみんなに癒しを届けてくださいね。



がんばったネ

岡野 成利（千葉県）

保育園の運動会です。頑張ったお子さんを抱きしめたお母さん。大好きなお母さんに褒められて満悦の表情が素敵でした。





知事賞

安らぎ

杉山 暁飛（愛知県）

お母さんの腕を掴んで安心している姿を撮りました。



河原学園賞

まだまだ長生きしまっせ！

鈴木 詩渚里（愛知県）

80歳を迎えるおじいちゃんがまだまだ元気であるぞといわんばかりの愛顔を見せてくれたので撮りました。

愛媛広告協会賞



変わらないもの

西山 樹（東京都）

私の祖父母の家に娘を連れて遊びにいった時の一枚。赤飯と特製クッキーを焼いて待っていてくれた祖母。平然と過ごしながらも一番嬉しそうに出迎えてくれた祖父。私が幼い頃と変わらない宝物がそこにありました。

愛媛県商工会議所連合会賞



うんどうかい

高岡 心美（愛媛県）

当時9歳の私が見つけた妹と母の幸せそうな笑顔です。

愛媛経済同友会賞



かわいいお手伝いさん

安形 有生（愛知県）

お盆に親戚が来てみんなで墓参りに行った際に撮影しました。祖父の後ろに着いていきお手伝いしようとしていました。カメラに興味津々な様子がとても可愛らしかったです。

愛媛県IT推進協会賞



感謝

魚崎 羽美（愛媛県）

ピンクのカーネーションがよく似合う母。素敵な笑顔に、私も嬉しくなりました。

愛媛県獣医師会賞



なかよし

小松田 唯夏（愛知県）

仲良く遊んでいる家族の写真を撮りました。

愛媛県歯科医師会賞



おいしい？

廣部 美咲（福井県）

親戚の家で晩ごはんを食べているときに撮影しました。4歳の孫に「美味しいか？」と笑顔で聞いている様子は見ていて微笑ましかったです。

愛媛県理容生活衛生同業組合賞



ショートカット

濱田 麻佑（愛媛県）

いつもより短くカット。感想を聞かれた言葉に思わず笑みがこぼれた1枚。

愛媛県情報サービス産業協議会賞



画面の先には

尾作 万彩（東京都）

幼児期の妹弟の動画を見返している時の1枚です。全員がとにかく幸せそうで楽しそうな表情をしていたので写真に残しました。

「映像部門」

🎀 グランプリ 🎀

「まっちゃん」

愛媛中央産業技術専門学校
チームまっちゃん
(愛媛県)

この度はグランプリという素晴らしい賞をいただき、大変嬉しく思います。

「まっちゃん=あなたの忘れられない友人」です。

原作を読んだ時、学生時代にその時どきの時間を輝かせてくれた友人たちが鮮やかに浮かび上がりました。「青春の日々と最高の友人」を想起出来るような映画になっていましたら幸いです。未経験のなか健闘した役者陣の演技や、オリジナルのアニメーションや楽曲にも注目してご覧ください。



🎀 準グランプリ 🎀

「小さな神様と私」

皆尾 裕
(愛媛県)

出演の皆さんの自然体の演技と、西条・丹原の素晴らしいロケーション、衣装・小道具など関係者の皆様のご協力のおかげで受賞することができました。過去パート、現在パートのそれぞれで、撮影後にみんなでおいしくドーナツを食べたのが良い思い出です。今回の受賞を励みに、映像を通じて地域の魅力をもっと広く、そして深く伝えられる、鑑賞した人の心が豊かになる作品を作っていきたいです。



🎀 優秀賞 🎀

「まっちゃん」

新居浜市立東中学校美術部
(愛媛県)

このたびは、名誉ある賞を頂き大変光栄に思っています。映像化するとき、まずシナリオを読み、皆で「まっちゃん」「かっちゃん」の話方や表情などの人物像について考えました。1日の撮影時間が限られていたので、集中する時、楽しむ時のメリハリをつけて取り組みました。振り返ってみると、出演はもちろん、撮影、準備など、初めてのことが多く本当に特別な体験でした。初めての映像制作で拙い部分もありますが、楽しんでいただけたら幸いです。



入 選

「しりとりの続き」

大西 ひろし（大阪府）



この度は入選と審査委員さまの貴重なコメントをありがとうございました。人物の年齢や性別などをアレンジさせていただきましたが、原作の感動を損なわないよう気を付けて映像化しました。

2人の掛け合いを楽しんでいただけますと幸いです。

「まゆつば」

永野 和哉（東京都）



この度は素晴らしい賞をいただき大変光栄です!ありがとうございます!

原作に登場する父がコミカルで可愛かったので、映像化するにあたり、あえて父視点から「家族の幸せ」について考えてみました。

お楽しみいただけたら嬉しいです。

「ラブレター」

山川 麻美子（神奈川県）



ショートケーキだと思っていたら消毒液が届いた。これ、私の主人が経験した実話です。聞き間違いをした人は決まりが悪そうだったようですが、主人の顔は思わずほころんだそうです。

この度は賞を頂きましてありがとうございます。

審査委員特別賞

「ノーネームレター」

箕面自由学園高等学校放送部
永田 陸
（大阪府）



「四つ葉のクローバー」

愛媛中央産業技術専門学校
チーム四つ葉のクローバー
（愛媛県）



「四つ葉のクローバー」

ゆかりとめぐる
（神奈川県）



「手帳の向こう」

三浦 彰浩
（愛媛県）



映像部門の受賞作品は愛顔感動ものがたり公式HPからご覧いただけます。





審査委員紹介

エピソード・写真部門



イツセー尾形 (審査委員長)

1952年福岡県生まれ。
1982年より現在まで続く「フツの人の日常を描く」一人芝居を開始。
一方で映画にも出演。
2005年「太陽」(アレクサンドル・ソクーロフ監督)



神野 紗希 (審査委員)

1983年愛媛県松山市生まれ。
俳人。聖心女子大学講師。
松山東高等学校在学中、俳句甲子園をきっかけに俳句をはじめ。歴代最年少で桂信子賞を受賞するなど、若手俳人のリーダー的存在として活躍。「HAIKULABO」を立ち上げ、愛媛の観光やものづくりを俳句で発信する。
2019年、「日めくり子規・漱石 俳句でめぐる365日」で第34回愛媛出版文化賞大賞。
著書にエッセイ集「もう泣かない電気毛布は裏切らない」など。
2020年、最新句集「すみれそよぐ」刊行。



愛媛県知事
中村 時広
(審査委員)

写真部門審査協力

愛媛県美術会
同 同
日野 義治
大内 清俊
楠本 真人

映像部門



榊井 省志 (審査委員長)

愛媛県久万高原町生まれ。
映画プロデューサー、東京藝術大学大学院名誉教授
大映を経て、アルタミラビクチャーズを設立。
代表作に、『Stat we ダンス?』『ウォーターボーイズ』など。愛媛ロケ作品に『がんばっていきまっしょい』『船を降りたら彼女の島』がある。
最新作は、『嘘の転校生』。



森 幸一郎 (審査委員)

愛媛県松山市生まれ。
ヒメブタの会代表
松山南高校、大阪芸術大学映像学科卒。2009年にヒメブタの会(愛媛を舞台にした自主映画の会)を設立。地域振興・人材育成をテーマに県内を拠点とした作品作りの傍ら、ワークショップ等を通じて多くのプロ・映画人を輩出。代表作『食堂ゆすかわ』『赤い橋のある町で』など。「まつやま市民映画事業」プロデューサー。



杉作 J 太郎 (審査委員)

愛媛県松山市生まれ。
漫画家、詩人、DJ
漫画家として「ガロ」などで活動。石井輝男監督作品『ゲンセンカン主人』三流さん役で俳優デビュー。2003年映画制作プロダクションを立ち上げ、映画を制作。2021年『杉作 J 太郎のファニーナイト』(ラジオ)放送中。



片岡 礼子 (審査委員)

愛媛県松前町生まれ。
俳優
1993年第6回 PFF スカラシップ作品『二十才の微熱』でスクリーンデビュー。
『ハッシュユ!』にて第45回ブルーリボン賞主演女優賞を受賞。最近の主な出演作品に『愛がなんだ』、『笑いのカイブツ』、『マッチング』などがある。



表彰式イベントゲスト朗読者紹介



水樹 奈々

愛媛県新居浜市生まれ。
声優・歌手

『NARUTOーナルトー』、『ハートキャッチプリキュア!』、『ONE PIECE』など多数のアニメーション作品に出演。

外画の吹き替えやナレーション、ラジオパーソナリ

テイ、ミュージカルの主演等と多岐に渡り活躍。
アーティストとしても声優史上初のオリコン首位を獲得、NHK紅白歌合戦に6年連続で出場、東京ドームや阪神甲子園球場などスタジアムクラスの公演も成功させる。
第64回芸術選奨文部科学大臣新人賞大衆芸能部門受賞。



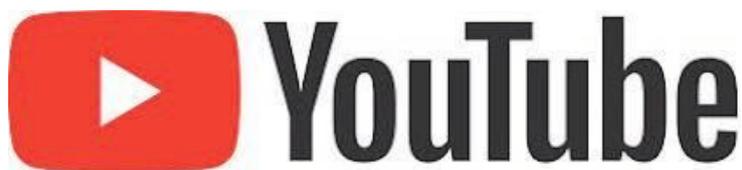
紺野 美沙子

1980年、慶応義塾大学在学中にNHK連続テレビ小説「虹を織る」のヒロイン役でデビュー。

1987年、日本アカデミー賞優秀助演女優賞を受賞。

1998年、国連開発計画親善大使の任命を受け、国際協力の分野でも活動中。

2010年秋から「紺野美沙子の朗読座」を主宰。音楽や影絵や映像など、様々なジャンルのアートと朗読を組み合わせたパフォーマンスを全国各地で公演している。
元祖スー女としても知られ横綱審議委員である。



表彰式の模様はYouTubeにて配信しています。

愛顔感動ものがたり表彰式イベント

検索

で検索

子どもたちの未来のために、 伝えたい想いがあります。

JAバンクえひめでは、食と農業に対する学習や農業体験などを
はじめとした様々なCSR活動を通じて、
自然と調和・共生できる
循環型社会の実現をめざし、地域の皆様の
豊かな未来の実現に取り組んでいます。

JAバンクえひめキャラクター
ぱんじゃくん



JAバンクえひめ

JA うま

JA えひめ未来

JA 周桑

JA おちいまばり

JA 今治立花

JA 松山市

JA えひめ中央

JA 愛媛たいき

JA にしうわ

JA ひがしうわ

JA えひめ南

JA 愛媛県信連



JAバンク えひめ
(愛媛県内JA / 県信連)

「JAバンクえひめ」は、愛媛県内11JAと愛媛県信連の総称です。

JAバンクえひめ

検索

愛^え顔^{がお}感動ものがたり

受賞作品集

令和七年二月発行

発行 愛媛県

観光スポーツ文化部文化局

文化振興課

〒七九〇一八五七〇

愛媛県松山市一番町四丁目四一

TEL (〇八九) 九四七一五五八一

印刷 株式会社 美統

エピソード部門の知事賞作品は、愛媛県出身の声優 水樹奈々さんの朗読に合わせたオリジナル映像をYouTubeで公開しています。

令和5年度 一般の部 知事賞
「回り道」 城戸美佐



令和5年度 高校生以下の部 知事賞
「未来のノート」 越智亮介



愛顔感動ものがたり
公式ホームページ

愛顔感動ものがたり
公式Instagram

愛顔感動ものがたり

検索 

